【東京教会宣教教育資料20170305】

文責：李跆百牧師（宣教委員会の指導牧師）

訳：徐民教

※この資料は東京教会宣教委員会の教育資料であり、すべての著作権は東京教会にあります。

宣教の聖書的根拠

**Ⅰ．旧約聖書における宣教の基礎**

　一般的に宣教神学の聖書的根拠を新約聖書だけから探す傾向があります。しかし、旧約聖書の主人公もイエス・キリストであることを鑑みると旧約聖書からも宣教の根拠を見つけることができます。神さまは世の中を救うために独り子を贈ってからこの世を愛されたのではなく、この世を創造される前から（エフェソ１：４）この世を愛された方です。

　旧約聖書のイスラエルの歴史は、イスラエルを通して全世界を救われるご計画を立てられた「神さまの救いの歴史」です。ディアスポラ（Ｄｉａｓｐｏｒａ）の歴史も神さまの宣教の歴史です。使徒パウロのアテネ説教（使徒言行録１７章）は、天地創造の神さまこそ歴史の神さまであり、独り子をこの世に贈ってくださった神さまがまさに救いと審判の神さまであることを強調しています。このように「知られざる神」に仕えるギリシャ人に新旧約の神さまの存在を知らしめることでパウロは宣教の接点の模索を試みました。

**１．原始福音**

　「原始福音（Ｍｏｔｈｅｒ　Ｐｒｏｍｉｓｅ）」として知られている創世記３章１５節に記されている、「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に、私は敵意を置く。彼はお前の頭を砕き、お前は彼のかかとを砕く」という約束は、イエス・キリストの贖いの苦難を予言された御言葉です。

　ヨハネス・ブラウ（Ｊｏｈａｎｎｅｓ　Ｂｌａｕｗ）が指摘したように、「すべての聖書を理解する鍵は創世記の１章～１１章」の中にあり、その中でも原始福音として知られている創世記３章１５節の御言葉こそ鍵のなかの鍵です。この約束のなかに歴史の神学があり、宣教の歴史が含まれています。

**２．アブラハムとの約束**

　原始福音の糸口はアブラハムとの約束から紐解かれます。すべての人類のための贖いの祝福がアブラハムとの約束で明確に啓示されます。創世記１２章３節「あなたを祝福する人をわたしは祝福し、あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべてあなたによって祝福に入る。」の約束は、原始福音の続きとして表れます。女の子孫が蛇の頭を砕くという約束によって人間を審判から救うという救いの約束がアブラハムとの契約でより具体的に啓示されます。創世記４章～１１章までの記録では人間が神さまから段々遠のいていく堕落像が描かれています。このような人間堕落の状況下で神さまがアブラハムを呼ばれ、祝福され、救いの約束をされました。

　この約束の内容は、第一、土地の約束でした。故郷を離れたアブラハムにカナンの土地を約束されました。神さまはアブラハムに「主は、ロトが別れて行った後、アブラハムに言われた。さあ、目を上げて、あなたがいる場所から東西南北を見渡しなさい。見える限りの土地をすべて、わたしは永久にあなたとあなたの子孫に与える。」（創世記１３章１４節～１５節）と言われました。

　第二、大きな民族の約束でした。「わたしはあなたを大いなる国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を高める、祝福の源となるように。」（創世記１２章２節）という約束をされました。そして、繁栄することを予言されました。この予言はソロモン王の時代に「数えることも調べることもできないほど多い民」（列王記上３章８節）として成し遂げられました。ところで、この大いなる民は約束のカナンの地に住んでいたイスラエル民族だけを指し示すものではありませんでした。やがてイスラエルを通してこの世に再臨されるメシアを信じることで生まれる霊的イスラエルを総括して予言された内容です。パウロはガラテヤの信徒への手紙３章でアブラハムの子孫がやがて受ける祝福の本質について、その霊的性質について次のように記しています。「だから、信仰によって生きる人々こそ、アブラハムの子であるとわきまえなさい。」（ガラテヤ３章７節）ここでパウロが強調する祝福は霊的救いの祝福を意味します。この祝福が万人に適用されるためには宣教的課題を伴うことが不可欠です。このような宣教的暗示が創世記１２章に含まれていることを私たちは看過できません。

**３．出エジプト事件**

　出エジプト事件に比較的意味を付与したのは次の２点で把握できます。

第一に、出エジプトによって一つの民族が生まれ、神さまを信じる民の実情をエジプトからカナンの地に至るまでの地域に散在していたすべての民族に見せてくださったことです。

　第二に、シナイ山でモーセは神さまから啓示を受け、イスラエルの民にその啓示を紹介した事実です。この律法を通して神さまの御旨がより具体的に啓示され、その啓示の中で神さまの宇宙的な愛が明示されました。アブラハムをお選びになり一つの民族にされ、彼らに啓示を与えられたことは、神さまの御名と御旨が全世界に広められ、宣べ伝えられることを望んでいらっしゃることを教えてくださいます。

**４．ディアスポラ**

　イスラエル民族の外国への移動の初期は商業的目的より戦争捕虜としての強制移送が多かったです。バビロン捕囚はその代表的なディアスポラ（Ｄｉａｓｐｏｒａ）現象として捉えるべきでしょう。このディアスポラ現象の宣教的意味は大きく次の２点で探すことができます。

　第一に、遠い外国で神殿の祭事の代わりに会堂を用いて礼拝を行った点です。会堂を用いたユダヤ人は祭事形式の礼拝からメッセージ中心の礼拝へと会衆礼拝の形式が変わったことで、福音のメッセージを通しての宣教の可能性が大きく広がりました。宗教的革命としての会堂礼拝は結局のところ新約時代を備えたことに繋がるのです。

　第二に、会堂の使用を通してユダヤ人宣教の接点を容易に発見できました。パウロの場合、会堂はユダヤ人伝道の最適な場所になりました。使徒言行録で伺えるパウロの宣教戦略は会堂使用の既得権を最大限活用してユダヤ人に福音を伝えた後、そこで回心したグループを核にして教会を始めたことです。まさに会堂伝道こそパウロ宣教のゆりかごだと言わざるを得ません。

**Ⅱ．新約聖書における宣教の基礎**

**１．王国と宣教**

イエス・キリストと洗礼者ヨハネの説教の主題は「神の国」でした。復活された後でもイエス様のメッセージの主題は「神の国」でした。（使徒言行録１章３節）伝道者フィリピも「神の国」（使徒言行録８章１２節）を説きました。パウロも「神の国」を主題に宣教しました（使徒言行録２８章３１節）。この神の国の福音は霊魂に関する福音であったので、常に霊魂の変化を前提に宣べ伝えられました。霊魂変化の福音、すなわち悔い改めの福音でした。この悔い改めの関門を通過してはじめて神さまの救いのご計画という祝福を味わえることが天国福音の真髄です。新約の天国の概念は同時に歴史の終末概念と結び付けられ宣教的使命と共に強調されました。主の再臨によって完成される天国の究極的実現は、悔い改めから始まる天国の福音が地の果てにまで宣べ伝えられねばならないという条件がついています（マタイによる福音書２４章１４節）。

ユダヤ人が失敗した最も大きな原因は、このような王国の霊的意味を悟ることができなかったことにあります。イエス様の弟子たちでさえ自分たちの任務はキリストがイスラエルという可視的王国を回復されるまで受動的に待つことだけだと思っていました（使徒言行録１章６節）。弟子たちでさえ神の国の実現をイスラエル中心的に解釈してしまい、王国の霊的概念と宣教的使命の関連性を理解できていませんでした。イエス様は彼らのそのような考え方を是正するために、イスラエルの回復に対する時期的関心と受動的王国の渡来に対して期待する姿勢から脱却し、権能を授かり地の果てに至るまでイエス様の証人になって宣教することを教えられました。

**２．イエス様と異邦人**

　私たちは福音の記録の中でイエス様が異邦人の宣教を重要視されていない印象を与える聖句に出くわすことがあります。弟子たちに伝道を派遣される際に「異邦人の道に入ってはならない」（マタイによる福音書１０章５節）と言われました。「サマリア人の町に入ってはならない」と言われ、カナンの女性にはイエス様ご自身が「イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない」（マタイによる福音書１５章２４節）と言われました。このような聖句は私たちを困惑させたりします。

　ところで、Ｊｏｈａｎｎｅｓ　Ｈ．Ｂａｖｉｎｃｋ氏は、このような表現は当時がまだ福音伝播が全世界的な次元に至っていないことを示すに過ぎないと解釈しています。しかし、異邦宣教について時期尚早だと解釈するより、メシア待望思想を持っていたイスラエル民族に先に福音を集中的に伝えた後で異邦宣教をするべきという宣教戦略的次元の表現として理解すべきです。

　イエス様はただ単に異邦人伝道が時期尚早だと言われたのではなく、ユダヤ人伝道の緊急度と必要性を強調されたわけです。「救いはユダヤ人から来るからだ」（ヨハネによる福音書４章２２節）とサマリア人女性に語られたことも、イエス様がユダ部族を通して来られた予言成就のメシアである証をされただけであり、サマリア人には救いがないという宣教否定論的な言及として見ることはできません。それは、イエス・キリストご自身がシカルというサマリアの町の井戸に水を汲みに来た女性に声をかけられ、伝道された事実がイエス様の本意を証明してくれます。

　イエス様は「あなたがたはこの世の光である」と言われました。また、カファルナウムの百人隊長に出会ったとき旧約の予言を喩えて次のように言われました。

「言っておくが、いつか、東や西から大勢の人が来て、天の国でアブラハムとイサク、ヤコブと共に宴会の席に着く。」（マタイによる福音書８章１１節）

「はっきり言っておく。世界中どこでも、この福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう。」（マタイ２６章１３節）とベタニアのマリアの信仰を褒められました。

　また、「そして、御国のこの福音はあらゆる民への証として、全世界に宣べ伝えられる。それから、終わりが来る。」（マタイ２４章１４節）と言われました。

**３．宣教命令**

　「だから、あなたがたは行って、すべての民を私の弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」（マタイ２８章１９節～２０節）

　この宣教命令は新約聖書で発見できる最も代表的な宣教命令です。この命令は４つの動詞が分詞形になっている補助動詞です。

　それは、「行くこと（伝道活動）」と、「洗礼を授けること（教会設立）」、「教えること（教会教育）」を通して徹底的に弟子として育てて、また彼らを「伝道する働き人にすること」です。すなわち、弟子化運動による宣教運動を意味します。

**４．使徒言行録と宣教**

　使徒言行録は使徒たちの宣教記録です。使徒言行録の教訓は当然使徒たちの宣教言行録ではありますが、実は復活されたキリストの言行録でもあります。なぜなら、宣教の主役が使徒たちではなく復活されたキリストであり、それが強調されているためです。

　同じく、使徒言行録の著者であるルカは、宣教運動のはじまりとして知られているアンティオキア教会の宣教もバナバやパウロが主役ではなく、聖霊様が彼らを立てて派遣された事実を記しています。パウロが第三次宣教旅行を終えてエルサレム教会で宣教報告をする際に、「自分の奉仕を通して神が異邦人の間で行われたこと」（使徒言行録２１章１９節）、すなわち宣教の主役が神さまであったことを強調しました。

　アンティオキア教会で起きた問題のためエルサレム総会が会議をする際にも、聖霊様が総会をお導きくださり、決議させてくださった事実を「聖霊と私たちは」（使徒言行録１５章２８節）という表現で明らかにしています。つまり、エルサレム総会も聖霊様のお導きによって進められたということを意味します。パウロ自身が「異邦宣教のために選ばれた器」（使徒言行録９章１５節）であることや、ペテロをコルネリウスの家に送って福音を宣べ伝えさせたこと（使徒言行録１０章）も聖霊様がなさった出来事です。

また、神さまはパウロ宣教のコースも決められました（使徒言行録６章６節～７節）。そして、ヨーロッパー宣教の開始を幻で指示されました（使徒言行録１６章９節～１０節）。

さらに、パウロ宣教の主導権はパウロ自身より彼を道具として用いられる聖霊様であることを使徒言行録は重ねて強調しています（使徒言行録１８章９節～１０節）。

**Ⅲ．結論**

　宣教とは、救われた弟子たちを通して神の国を拡張させる神さまの働きです。このような宣教観に照らし合わせると、これまでの宣教運動について十分な注意と関心が集中できなかったことを指摘せざるを得ません。

　宣教の主役に対する認識の問題です。それは、宣教の正当性と方法論は宣教学の関心事になってきましたが、宣教の主役であるキリストの主権性が十分に強調されてこなかったということです。

　宣教の命令の中の４つの動詞は分析されつつ、その意味自体は強調されながらも天と地上の権能をお持ちのイエス様の権能とその主権に対して服従としての宣教の意味合いが度外視されたことです。

　これまで、この点がもっと強調されていれば、宣教の結果として派生される教派の乱立現象や宣教師たちの被宣教地での不条理が極少化されたでしょう。プロテスタント教会の教会観はローマカトリックの教会観を反対することに執着し過ぎたことは否定できません。キリスト教の改革者たちが強調した教会の三大表式である「御言葉」、「聖礼」、「勧懲」は宣教が排除された受動的な教会観です。

　Ｃ．Ｗ．Ｗｉｌｌｉａｍｓ氏が指摘されたように、今日のプロテスタントは宗教改革者たちの遺産である受動的かつ固定的な教会観から、能動的かつ革新的でありながらも宣教を強調する教会に変わらなければならないということです。

※別紙は、創世記からヨハネの黙示録までの略語と何章まであるのかを記入したり、裏面の聖書に対する讃美歌を覚えることで聖書に親しんでいただくためのものです。